

[論 文]

幼児期の仲間関係における異性との相互交渉

The interaction between boys and girls in preschool children

藤 田 文

Fujita Aya

Abstract

The purpose of this study was to investigate the interaction between boys and girls in preschool children. The participants were 20 three-year-old, 15 four-year-old, 16 five-year-old preschool children. Their behaviors during free play were observed using a video-camera. The interaction between boys and girls was analyzed. The main results showed that there were some children who often interacted with the opposite-gender children. Most of three-years-old children interacted with opposite-gender children but such kind of children was specialized with age. And we observed that one girl played in the group of boys and one boy played in the group of girls. The former pattern was observed more. These findings suggested that girls had the flexible attitude and the social ability to opposite-gender interactions more than boys.

Key words: the interaction between boys and girls, gender difference in social behavior, preschool children, gender-typed play, gender-typed communication,

【問題と目的】

幼児期の仲間関係では、同性の子ども同士で遊んでいる場合が非常に多い。児童期においても、同性の集団で遊ぶ状況は、異性の集団で遊ぶのに比べ10倍を超えている (Maccoby,1988)。このような遊びにおけるジェンダー分離は、仲間関係を発達させていく上で重要な意味をもつことが指摘されている (Golombok & Fivash,1994)。そこで本研究では、まず遊びにおけるジェンダー分離に関する知見とその解釈を概観する。また、このようなジェンダー分離が顕著であることから、従来の子どもの仲間関係の研究は多くが同性同士の相互交渉の様子を検討していた。しかし、少数であっても異性との相互交渉は見られるものであり、幼児の社会的能力の別の側面が明らかになると考えられる。したがって次に、ジェンダー分離に反した異性との相互交渉について自然場面での観察を行い、異性との関わりから幼児の社会性の発達について考察する。

早期の仲間との遊びのパターンは、乳児期の視線交流や接近から始まり、1、2歳児の相互の関わりの少ない平行遊びを経て、3歳児から少しずつ関わりの多い連合・協同遊びへと発達していく。この経過の中で、遊びがジェンダー分離するのは、2歳から3歳の時

期だといわれている。金田・清水（2003）では、1歳児から3歳児を対象に、保育場面の参加型観察と実験観察を行い、遊びの興味に性差が見られるかどうかを検討した。その結果、1歳児クラスにおいてはまだ男女差はほとんど見られないこと、2歳児クラスにおいて、遊びの選好性に男女差が見られ始めるということが示された。また、同性の仲間を好むのは女兒の方が早く、2歳ごろに見られる。男児は3歳までは同性の仲間を好む傾向は見られなかった。また、Golombokら（1994）の研究では、生後12ヶ月で、遊びの選好にジェンダー分離が見られ、女兒はぬいぐるみ、玩具の食器などを選好し、男児は乗り物、玩具の道具、ロボットなどを選好することが示されている。友達の選好に関するジェンダー分離は、2歳から3歳の間に生じることが同様に示されている。このように全体的には2歳から3歳でジェンダー分離が始まるのである。また、3歳を過ぎたところから遊びが複雑化し、男児と女兒の遊びの差が明確になってくる。そして5、6歳では大部分は同性の仲間と遊ぶジェンダー分離がさらに明確になる。小学生を対象とした調査では、5～6年生では男児の83%、女兒の66%が「同性ばかりと遊ぶ」と回答していることも示されている（上瀬,2000）。

このようなジェンダー分離が生じる理由については、3つの基本的説明がなされてきている（Golombokら,1994）。第一は、社会的学習理論に基づく直接強化による説明である。子どもは、同じジェンダーの遊び友達を選び、ジェンダー型づけされている遊びをすることを大人や、他の子どもにより強化される。大人はジェンダー型づけされている玩具で遊ぶのを強化する。特に男児に対する強化が強いといわれている。しかし、子どもがジェンダー型づけされている玩具を好むから親が与えるということも考えられるため、大人による強化はその影響が確かなものではない。したがって、周りの他の子どもからの強化の方がその影響が強いと考えられている。

第二は、認知的協和による説明である。子どもは自分に似ている遊び友達を好むため、自分のジェンダーがわかると同じジェンダーの子どもと遊ぶようになる。子どもがジェンダーについて認知的に理解することが、ジェンダー型づけされた玩具を選び同じジェンダーの遊び友達を選好することと関連しているという考え方である。

ジェンダーに関する意識がいつごろから生じるかについては、池田（1985a,b,1986,1988）で研究されている。この研究では、身体的性差に関する幼児の質問行動を中心に性・生命においての概念を幼児たちがどのように作り上げていくかが検討された。生活場面全体での男児と女兒の違い、お父さんとお母さんの違いなどについて幼児が行った質問内容と質問が発せられた時期を、父親・母親および保育士の三者に回答してもらった。分析の結果、性・生・死についての発問は質・量とも幼児により非常に個人差が大きいが、2歳ですでに身体的な性差については質問を行っており、ジェンダーを意識していることが明らかになった。

また、ジェンダーのラベルづけに関する研究では（相良,2000）、幼児は生後24か月から40か月くらいの間で自分や他者を男女でラベルづけできるようになること、この後5～6歳で、性の恒常性を理解できるようになることが示されている。

しかし、ジェンダーを認知的に理解したり、ジェンダーをラベルづけしたりする2歳より前に、子どもはすでにジェンダー型づけされた玩具を選好することがある。また、性の

恒常性を理解する5～6歳以前に、同性の仲間を好むことが示されている。したがって、認知的協和がジェンダー分離を説明する証拠は現時点では不十分であると考えられている。

第三は、行動一致性による説明である。男児と女児は異なる遊びの様式や相互作用の様式を持っているため、子どもは同じジェンダーの遊び友達を選好し、遊び様式や相互作用様式を共有する子どもと一緒にいるのを好むという考え方である。男女で相互交渉の様式が異なるために、異性との相互交渉は困難や不快感を伴うのである。

このような男女の違いは多くの研究で次のように指摘されている（Alessandra, C.ら, 2005; Golombokら, 1994; Knickmeyer, R. C.ら, 2005; Pol A. C. van Lierら, 2005; 相良, 2000; Serbian L. A., 1979）。男児は、車や電車を用いた遊び、冒険や戦いなどの活発で乱暴な遊びを好むという遊びの嗜好性があり、より活動的、攻撃的な遊び、大きな集団内や戸外での遊びを行う。また、男児の相互交渉は、優劣関係で決まることが多く、リーダーが生まれやすく、他人に命令したり、他人の話を邪魔する傾向があり言語は支配的地位を巡る。主張、自慢、討論、対立が多く、脅迫、攻撃、高圧、威嚇手段を用いて仲間に対し言語的・身体的な攻撃行動をとる。男児のかかわりは、独立的、競争的、支配的な相互交渉だといえるだろう。

女児は、台所セットや宝石を用いた遊び、人形遊びやお世話の遊びなどの遊びを好むという遊びの嗜好性があり、遊びで世話好きでよく声を出し、室内で二人で組になって遊ぶことが多い。また、女児の相互交渉は、リーダーの交代の話し合いが多く、議論で合意や妥協をし、関係作り、維持、同意の気持ちをあらわすなど対立緩和のコミュニケーションが特徴的である。女児の場合は社会的な働きかけが多く、友人と同じ考えであることを頻繁に表明し、他人の話をよく聞く。女児の関わりは、友好的、協同的、对人的交換性の高い相互交渉だといえるだろう。

このような相互交渉の違いにより男児集団・女児集団の中で生じる対立の頻度や、その解決方略に差が見られる。それぞれの相互交渉の方法は異性にはうまく機能しないため、自然と同性との遊びを好むようになる。これらの差は、親や仲間から直接強化されること、子ども自らが自分のジェンダーにふさわしい行動を選択していくことなどが背景にあると考えられるが、このように遊びの様式に差が生じてきたことで、男女混合の遊びが難しくなってくる。お互いの遊びの決まりごとが違うので、男児は女児と遊んでも物足りないし、女児は男児と遊んでも不快に感じることになる。男児は女児より活動的な遊びを好むという傾向も、遊びの好みの差を大きくしている。また、遊び様式が合うので、同じジェンダーの集団において、より複雑で進んだ遊びをすることができる。混合した集団では、遊びの様式に対立があるので、相互作用は衰え、遊びの質も進んだものでなくなる。このためジェンダー分離が形成されていくのである。

以上のことから、2歳から3歳の間で、男児と女児の遊びの内容が異なるようになり同性の仲間との遊びを好むようになるというジェンダー分離が始まり、その後各性別に分かれた仲間関係が形成されていくと考えられる。

このように、3歳以降では同性との関わりがほとんどであるため、必然的に研究も同性同士の仲間関係を取り扱ったものが多い。したがって、異性との関わりについては、あま

り研究されていないのが現状である。しかし池田（1985）も述べているように、幼児期に自己の性別についての認識が成立すると、それは当然「異性」という存在を意識させる契機になり、異性との「関係」についての情報も取り込み始めているので、異性との関わり方についても、研究する必要があると考えられる。また、同性との関わりが主であるといっても、女兒集団の中によく入っている男児や、逆に男児集団の中で遊ぶ女兒など異性とよく関わる幼児もみうけられる。したがって、異性への意識面だけでなく実際の関わりがどのように行われているかについての基礎的なデータの収集が必要だと考えられる。

そこで本研究は、自由遊び場面での異性との関わりを観察し、幼児の異性との関わり方の発達について検討することを目的とする。その際、次の観点を中心に分析していく。

まず、異性とよく遊ぶ特定の幼児はいるのか、特定の異性との関係性はみられるのかについてである。多くの幼児が同性の仲間と遊ぶ中で、異性の仲間と遊ぶというのは、特定の幼児の特性と考えてよいのだろうか、もしくは、状況によってどの幼児も異性と同程度に関わっているのだろうか。また、異性への好意を示すような特定の関係はみられるのだろうか。これらの点を、幼児の異性との関わり方のエピソードに登場する回数を調べて検討する。

次に、異性との関わり方の特徴についてである。男児と女兒が関わる時、1対1が多いのか、もしくは、1人の幼児が集団の中に入っていくのか、男児集団対女兒集団なのだろうか。この点を明らかにするために異性との関わりエピソードの男女の構成人数のパターンを検討する。

また、男女で関わり方や遊びの様式が違っているといわれているが、異性で関わる場合は、どの様に関わっているのだろうか。従来の研究結果でいわれている同性との関わりやすさを考えると、異性との関わり方には難しさがあると考えられるが、そのような状況で異性の相手と具体的にどのように関わっているのだろうか。この点を検討するために、異性との関わり方について具体的に検討する。

【方 法】

対象者：本研究の対象者は、3歳児クラス20名（男児13名、女兒7名）、4歳児クラス15名（男児10名、女兒5名）、5歳児クラス16名（男児3名、女兒13名）の幼児計51名だった。

手続き：保育園において、1回2時間の観察を11日間実施した。1回の観察につき観察者は3名だった。観察期間は、11月19日から12月17日までだった。

3名の観察者がそれぞれ1台ビデオカメラを持ち、保育園で異性と遊んでいる幼児を中心にビデオ撮影を行った。保育園側から許可された保育場面で撮影を行った。その中には、自由遊び場面と設定保育場面（リズム運動、歌、制作等）の両方が含まれていた。

異性同士が関わりを持っている場面を目撃したら、その場面の撮影を開始した。遊んでいた幼児たちの中でどちらかの性別の子がいなくなり、同性同士だけの遊びになったり、1人になったりした場合に撮影を終了した。撮影中に、異性同士の関わりが長時間に及んだ場合でも、幼児たちの遊びが終わるまで撮影を続けた。幼児たちの遊びの中に保育士が加わり、幼児たちの興味が保育士に集中し遊びの中心が保育士になった場合は、幼児同士

の関わりが見られないので撮影を終了した。

【結果】

分析方法：11日間の観察ビデオ1040分間の幼児の行動を分析した。ビデオ録画された画像の中から、異性が関わっている場面をすべてエピソードとして取り出し、異性の関わりの方の逐語録を作成した。エピソードは全部で50場面抽出できた。各年齢のエピソード数は3歳児21エピソード、4歳児12エピソード、5歳児9エピソードで、異年齢の幼児が含まれているものが8エピソードだった。

(1) 異性との関わりエピソードにおける登場回数

異性と関わる回数の多い幼児は、特定の幼児なのだろうか。多くの幼児が同性の仲間と関わる中で、異性の仲間と関わるというのは、特定の幼児の特性と考えてよいのだろうか、もしくは、状況によってどの幼児も異性と同程度に関わっているのだろうか。この点を、幼児の異性との関わりエピソードに登場する回数を調べて検討した。

まず、各幼児がエピソードに何回登場しているかを分析した。エピソード登場回数が最も多い幼児で9回だったため、0回、1～3回、4～6回、7～9回と登場回数を区分した。各幼児をエピソード登場回数により分類し、年齢別に図1～3に示した。図1から、3歳児では男児で92%、女児で100%の幼児がエピソードに登場したが、4、5歳児では、もともと人数の少ない4歳女児、5歳男児を除き、50%程度の幼児しかエピソードに登場していないことが示された。また、同様のデータで、4回以上の登場回数の人数の割合を男女込みで分析した結果、3歳児では70%、4歳児では33.3%、5歳児では12.5%となり、加齢に伴い、登場回数の多い幼児が減少することが明らかになった。

この結果より、3歳児では異性と関わる特定の幼児は見られずほとんどの幼児が異性と関わっていたが、4、5歳児では異性と関わる幼児が特定化される可能性が示された。

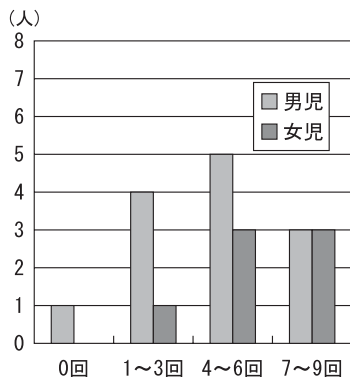


図1 3歳児のエピソード中の出現回数

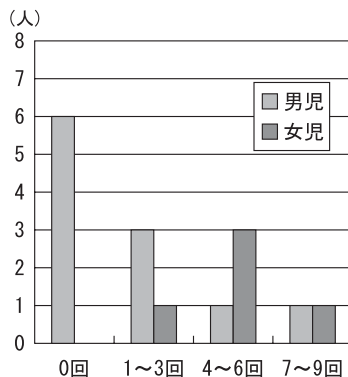


図2 4歳児のエピソード中の出現回数

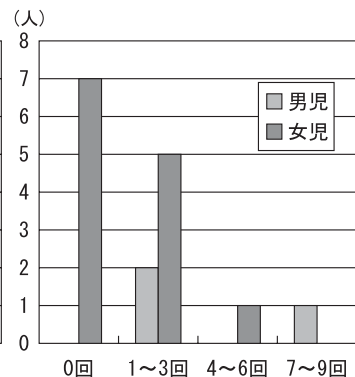


図3 5歳児のエピソード中の出現回数

(2) 異性との関わりエピソードにおける特定の関係性の存在

異性との関わりエピソードにおいて、特定の幼児同士の関わりがみられるかどうかを分析した。同じ幼児同士が同じエピソードに登場した回数を分析した。その結果、頻繁に登場した特定の幼児同士の関係はみられなかった。

しかし、保育場面の中では、ある男児が、特定の女児を無理やり横に座らせたり、肩を組ませたりするような行為、ある女児が、特定の男児を遊びに誘う、男児の後をついていく行為などが観察された。この女児は、その男児に好意を持っていると観察者に自分から話した。このように好意を持っている特定の相手とかかわろうとする行為は観察されたが、頻度の高いものではなかった。

(3) 異性の関わりエピソードにおける男女の構成人数パターン

異性の関わりでは、1人対1人が多いのか、もしくは、1人の幼児が集団の中に入っていくのか、男児集団対女児集団なのかといった、男女の構成人数のパターンを明らかにする必要がある。そこで、異性との関わりエピソードの男女の構成人数について、そのパターンを分析した。その結果、1人対1人、1人対複数、複数対複数のパターンに分類できた。表1は、年齢別に各パターンのエピソード数とその割合を示したものである。

表1より、1人対1人、1人対複数など片方が1人というパターンが多く見られ、複数対複数の関係はあまり見られなかった。年齢別で見ると、3、4歳は1人対複数が多く、5歳児は1人対1人が多かった。異年齢の場合は、1人対1人の関係はまったく見られず、すべてが複数対複数、または1人対複数のパターンだった。

また、表2は表1の1人対複数のエピソードを取り出し、年齢別に男児1人対女児複数、女児1人対男児複数で分類した。このとき異年齢の5エピソードは1人の幼児の年齢の中に分類した。表2から、男児1人対女児複数に比べて、女児1人対男児複数の方がやや多く見られた。

表2のエピソードで複数の異性に1人で参加している幼児には同じ幼児も登場しているので、何人の幼児が登場しているのか実人数を調べた。その結果、3歳児では9名、4歳児では5名、5歳児では2名だった。これらの幼児が図1～3に示したエピソード登場回数のどこに含まれるかを分析した。その結果、エピソード登場回数が4回以上の幼児が3歳では9人中8人、4歳では5人中5人、5歳では2人中1人となっていた。このことから、4回～6回、7回～9回という異性との関わりエピソードへの登場回数が多い幼児は、男女ともに表2の1人対複数の1人の幼児にあてはまるケースが多いということが明らかになった。

表1 異性との関わりエピソードの男女構成人数パターン

	3歳児	4歳児	5歳児	異年齢	計
1人対1人	5(24.0)	4(33.0)	7(78.0)	0(0.0)	16(32.0)
1人対複数	11(52.0)	5(42.0)	2(22.0)	5(62.5)	23(46.0)
複数対複数	5(24.0)	3(25.0)	0(0.0)	3(37.5)	11(22.0)
計	21(100.0)	12(100.0)	9(100.0)	8(100.0)	23(100.0)

注：数値はエピソード数、カッコ内は%を示す。

表2 異性との関わりパターン「1人対複数」の男女構成

	3歳児	4歳児	5歳児	計
男児1人対女児複数	4(33.3)	4(44.4)	1(50.0)	9(39.1)
女児1人対男児複数	8(66.7)	5(55.6)	1(50.0)	14(60.9)
計	12(100.0)	9(100.0)	2(100.0)	23(100.0)

注：数値はエピソード数、カッコ内は%を示す。

(4) 異性との関わり方の特徴

異性との関わり方の特徴を調べるため、50エピソードの内容を分析した。最も多く見られたエピソードの種類は、異性同士でうまく遊んでいるもので、19エピソードあった。その内訳は、3歳児が10エピソード(47.6%)、4歳児が3エピソード(25%)、5歳児が5エピソード(62.5%)だった。全体のエピソード数に対する割合は、5歳児が3、4歳児に比べて高かった。このことから3、4歳児に比べ5歳児の方が異性との関わりでいざこざが少なくうまく関わっていたことが示された。場面の内容としては、砂遊び、おままごと、お絵かき、そうじといったものだった。その他のエピソードでは、女児から男児への働きかけと男児から女児への働きかけが見られた。

女児から男児への働きかけは、女児が男児にちょっかいを出したり、女児から男児の手をひいて遊んだり、女児が男児を遊びに誘うといったものであった。例えば、教室で座ってクリスマスのモールを作成中に、5歳女児Aちゃんが5歳男児H君を「あわてんぼうのH君サンタ」と、あわてんぼうのサンタクロースの歌にあわせてからかうが、H君は反応せず、もくもくと製作を続けているという場面があった。

また、女児が男児をお世話する場面が見られた。女児が男児をお世話する場面は、足を拭かずにホールに上がろうとした男児に対して女児がタオルを渡して足を拭くよう促す、男児がたたかれている場面で女児がかばう、女児が座る場所がない男児のために横に座っている幼児に対してつめて座るように促すなどの姿が見られた。男児が女児をお世話する場面は見られなかった。

男児から女児への働きかけは、遊びがうまくいかず、いざこざが生じる場面が多かった。いざこざのエピソードは3歳児が多く、このいざこざはすべて男児から女児に怒鳴ったり、泣かせたりしているものであった。例えば、3歳男児B君が、3歳女児Kちゃんが砂場で山を作っているところに棒を持って現れ、Kちゃんが作った山を壊すが、KちゃんはB君の行動をじっと見ているがその場を立ち去るという場面があった。

また、男児が女児から無視される場面が見られた。男児が話しかけているが、女児が反応せず男児の会話が独り言になっている場面や男児が女児の肩を抱いて歩いたり、近くに座って歌を歌ったりするが女児は特に反応しないという場面が見られた。

共有された遊び場面でない場合の異性同士の関わりは、相手の気を引こうとするものが多いが、男児よりも女児の方がやや向社会的行動が多いことが示された。

【考察】

本研究は、自由遊び場面での異性との関わりを観察し、幼児の異性との相互交渉について検討することを目的とした。

まず、異性とよく遊ぶ特定の幼児がいるのかどうか、異性との関わりのエピソードに登場する回数を調べて検討した。その結果、3歳児では異性と関わる特定の幼児は見られずほとんどの幼児が異性と関わっていたが、4、5歳児では異性と関わる幼児が特定化されるという発達的变化が示された。このことから、3歳児では、遊びのジェンダー分離が始まる時期であるものの、まだ男女の相互交渉様式の違いが少なく男女一緒に遊ぶことが多いが、4、5歳児になると男女の違いが大きくなり、男女別々の遊びが促進され、異性とはそれほど関わらない幼児が出てくることが示唆された。これは、3歳頃からジェンダー分離が形成され始めるという従来の研究結果と一致する結果である。ただ、全体的には異性と関わる幼児が減少するが、特定の幼児が異性と関わる可能性が本研究では示された。つまり、異性との関わり頻度には個人差が生じてくると考えられる。

次に異性との関わりエピソードにおいて、特定の幼児同士の関わりがみられるかどうかを検討した。その結果、エピソードに頻繁に登場した特定の異性関係はみられなかった。しかし、保育場面の中では、好意を持っていると思われる特定の相手とコミュニケーションをとろうとする行為を観察することができた。しかし、その頻度は低く、本研究のエピソードのみでは、特定の関係があることは示せなかった。特定の異性への好意的関係性については、長期的な観察が必要であろう。

また、異性との関わりの特徴について、エピソードの男女構成人数のパターンを検討した結果、1人对1人、1人对複数など片方が1人というパターンが多く見られ、複数対複数の関係はあまり見られなかった。これは、複数対複数だった場合は、同性同士のグループに分かれてしまうからではないかと考えられる。

一人対複数のパターンのエピソードにおいて、複数の異性の中に1人で参加している幼児は、異性との関わりエピソードへの登場回数が多い幼児であるということが明らかになった。さらに、1人对複数のエピソードの1人にあたる幼児が男児なのか女児なのかを調べるために、1人对複数のエピソードを取り出し、年齢別に男児1人对女児複数、女児1人对男児複数のパターンに分類した。全体的に男児1人对女児複数に比べて、女児1人对男児複数の方がやや多く見られた。これは、前述した上瀬(2000)の研究で、同性とばかり遊ぶと回答した小学生が男児よりも女児の方が少なかったことと一致する結果となった。女児の場合、社会的な働きかけが多いという特徴があり、友人と同じ考えであることを頻繁に表明し、他人の話をよく聞くという相互交渉の特質を持つ。一方男児の場合は、他人に命令したり、他人の話を邪魔したりする傾向が強く、仲間に対し言語的・身体的な攻撃行動をとるといった相互交渉の特質を持つ。そのため、女児の方が男児に比べ、異性集団に対しても柔軟な態度をとり、遊び相手のジェンダーにより遊びの様式を合わせるなど周りの環境に適応する力があることが示唆される。

実際の異性同士の関わり方を、エピソードを抽出することで検討した結果、最も多く見られたエピソードの種類は、男女が協調して関わっているものであった。場面としては、砂遊び、おままごと、お絵かき、そうじといった、ジェンダー型づけされた男児らしい遊

びや女兒らしい遊びではなく中性的な遊びや状況が多く見られた。このように、遊びのタイプによって、中世的な遊びの場合は異性との関わりが多く見られる可能性が示唆された。また、遊びがうまくいかず、いざこざが起きたり、男児が自由気ままにしたりしているエピソードもあり、そのすべてが3歳児であった。男女うまく遊んでいるものは、5歳児において高い割合で出現しており、また、3歳児では男女一緒にいてもあまり会話がなかったり、いざこざが起こったりと、うまく遊んでいるとは言えないものも多かった。このことは、3歳から5歳にかけて全体的に人とうまく関わるスキルが発達してきていることを示していると考えられる。

その他には、女兒から男児への働きかけが観察された。内容としては、女兒が男児にちょっかいを出したり、女兒から男児の手をひいて遊んだり、女兒から遊びに誘うといったものであった。また、女兒が男児をお世話する場面がみられたが、男児が女兒をお世話する場面は見られなかった。これは、男児に比べ女兒の方が社会的な働きかけが多いという特徴があり、仲間を世話するような行動をとるからだと考えられる。そして、男児が女兒から無視される場面が見られた。このことは、男児が他人に命令したり、他人の話を邪魔したりする傾向が強く、仲間に対し言語的な攻撃行動が用いられやすいためと考えられる。異性との相互交渉がうまくいかないエピソードから、行動一致性がジェンダー分離の説明として適切であることが示されているといえる。男児と女兒では相互交渉の仕方が異なっているために、遊びや会話が継続せず、遊びの発展性が見られないことが生じるといえるだろう。

以上の結果から、加齢に伴い異性との関わりが他の幼児よりも多い特定の幼児が存在するようになり、異性集団の中に1人で入って遊んでいることが示された。また、異性集団に1人で入るのはやや女兒の方が多いたことが示された。しかし、本研究では、このような異性集団に1人で入る幼児は、異性集団に入れるという意味では社会的技能が高いとみなされるのか、もしくは同性集団にうまく入れないため社会的技能は低いとみなされるのかなど、詳細の特徴は明らかにならなかった。今後、同性ばかりと関わる幼児との比較も含めて、異性と多く関わる幼児の特質を詳細に検討する必要があるだろう。

また、男児は相互作用パターンの特質から親密な交友関係を作るのが難しい場合が生じ、男児の孤立行動は不適応と関連していることが示されている (Coplanら, 2001)。その一方で、男児は女兒との相互作用においては男児同士の相互作用とは異なり必ずしも支配的一方的な相互作用をすることは限らず (Leman, P.ら, 2005)、本研究の結果のように女兒に世話されてうまく関わりが生じるという様子も観察される。したがって、男児にとっては、親しい人間関係を作っていくうえで、社会的能力の高いと考えられる女兒との関わりが必要だという指摘もある (Golombokら, 1994)。このような異性との相互交渉の中で生じる社会的スキルの獲得についても注目していくべきであろう。

最後に本研究では、エピソード数が年齢によって差があったことや、保育園のクラス構成が男女で差があったことが、結果に影響していることも考えられる。したがって今後は、年齢ごとのエピソード数を増やし、男女の人数も考慮したうえで検討していく必要がある。

【引用文献】

- Alessandra C. Iervolino, Melissa Hines, Susan E. Golombok, Jhon Rust, & Robert Plomin 2005 Genetic and Environmental Influences on Sex-Typed Behavior During the Preschool Years. *Child Development*, 76, 4, 825-840.
- Coplan, R.J., Marie-Helene Gavinski-Molina, Daniel G. Lagace-Seguin, & Wichmann, C. 2001 When Girls Versus Boys Play Alone: Nonsocial Play and Adjustment in Kindergarten. *Developmental Psychology*, 37, 4, 464-474.
- Golombok, S. & Fivush, R. 1994 Gender Development Cambridge University Press.
ジェンダーの発達心理学 (訳) 小林芳郎 瀧野揚三 田研出版
- 池田政子 1985a 幼児の性・生・死に関する質問 (1) 父母に対して 山梨県立女子短期大学紀要, 18, 23-36.
- 池田政子 1985b 幼児の性的行動 (2) —父母の眼を通して— 山梨県立女子短期大学紀要, 18, 42-56.
- 池田政子 1986 幼児の性・生・死に関する質問 (2) 保母に対して 山梨県立女子短期大学紀要, 19, 37-44.
- 池田政子 1988 幼児の性的行動 (1) 保母の眼を通して 山梨県立女子短期大学紀要, 21, 45-55.
- 上瀬由美子 2000 友人関係 伊藤 裕子編 ジェンダーの発達心理学 ミネルヴァ書房, 140-161.
- 金田利子・清水絵美 2003 2, 3歳児の性別認識 柏木恵子・高橋恵子(編) 心理学とジェンダー 有斐閣, 87-93.
- Knickmeyer, R. C., Wheelwright, S., Taylor, K., Raggatt, P., Hackett, G., & Baron-Cohen, S. 2005 Gender-Typed Play and Amniotic Testosterone. *Developmental Psychology*, 41, 3, 517-528.
- Leman, P.J., Ahmed, S., & Ozarow, L. 2005 Gender, Gender Relations, and the Social Dynamics of Children's Conversations. *Developmental Psychology*, 41, 1, 64-74.
- Maccoby, E.E. 1988 Gender as a social category. *Developmental Psychology*, 24, 755-765.
- Miller, P.M., Danaher, D.L., & Forbes, D. 1980 Sex-related strategies for coping with interpersonal conflicts in children aged five and seven. *Developmental Psychology*, 22, 543-548.
- Pol A. C. van Lier, Frank Vitaro, Brigitte Wanner, Patricia Vuijk, & Alfons A. M. Crijnen 2005 Gender Differences in Developmental Links Among Antisocial Behavior, Friends' Antisocial Behavior, and Peer Rejection in Childhood: Results From Two Cultures. *Child Development*, 76, 4, 841-855.
- Serbian L.A., & Conner, J.M. 1979 Sex-typing of children's play preferences and patterns of cognitive performance. *Journal of Genetic Psychology*, 134, 315-316.
- 相良順子 2000 ジェンダーと発達 伊藤 裕子編 ジェンダーの発達心理学 ミネルヴァ書房

【付 記】

本研究の調査には、保育園の園長先生をはじめ保育士の先生方ならびに園児の皆さんにご協力いただきました。また、本研究をまとめるにあたり、大分県立芸術文化短期大学情報コミュニケーション学科平成16年度卒業生小花法子さん、前川さゆりさん、森敏愛さんにご協力いただきました。ここに記して心より御礼申し上げます。

本研究の一部は、日本発達心理学会第18回大会において発表された。